



目と身体と脳をつなぐ ビジョントレーニング

【第15回】 「目の専門家」の使命について

一般社団法人 日本ビジョントレーニング普及協会理事 横田幹雄

**オプトメトリスト
北出勝也先生**

これまでの連載で触れたように、ビジョントレーニングは今、教員、保育士、心理士、医師、スポーツ選手など、様々な分野の方の関心を集めています。その中でも特に教育の現場、とりわけ子どもたちの発達支援に携わっている先生方には、見えない壁を乗り越える方法として、最近とみに注目されつつあります。今では広く理解されるようになつた発達支援とビジョントレーニングの深い関係について、早い時期に着目し、日本で普及に努めてこられた方がいます。当会顧問の北出勝也先生です。

北出先生は、米国オプトメトリストの資格を持ち、自ら立ち上げた「一般社団法人視覚トレーニング協会」の代表理事を務めるとともに、神戸で「Joy Vision」という視覚トレーニングセンターを主宰しています。実家が眼鏡店であったこと

もあり、オプトメトリストの資格に興味を抱いた北出先生は、大学を卒業後、眼鏡専門学校を経て米国オレゴン州のパシフィック大学オプトメトリースクールに入学しました。そして、ドクター・オブ・オプトメトリーカー・オブ・オプトメトリと取得して帰国。前述のJoy Visionを開設しました。

ここで「オプトメトリ」とは何か? ということですが、北出先生が留学前に学んだキクチ眼鏡専門学校(名古屋市)のサイトでは、「光学をはじめ生理学、解剖学、心理学などさまざまな面から、眼と視力について研究する学問」であると定義されています。

そして、「オプトメトリスト」とは、「オプトメトリーデ学んだ専門的な知識や技術を基礎として、眼に関する機能を検査し、視力の問題、眼の病気、その他の異常をみつける高度な技術者」であり、「乳幼児から高齢者まで、あらゆる人々にビジョンケア活動を行い、すべての人々が一生を通じて快適な視生活ができる

アメリカには昔から「検眼医」がいた現在、日本にはオプトメトリストの資格制度がないため、海外留学で資格を取得した方か、

ようサポートすること」がその「使命」であるとしています。さらにこの「ビジョンケア活動」の中には、「メガネやコンタクトレンズの処方だけではなく、使用方法やメンテナンス、生活習慣についてのアドバイス(申略)」さらに、学校での視力検査、幼児の視力の発達検査、両眼視に問題のある方の視機能トレーニング、発達障がいを伴う方々の視機能トレーニング、ロービジョンの方々の視力管理」も含まれると述べられています。

アメリカの大学でオプトメリーの理論と哲学、実践を学んだ北出先生が、帰国後の活動の一環として、子どもの発達支援に力を注ぐようになったのは自然の成り行きであり、いわばオプトメトリストとしての使命であつたと拝察いたします。

オプトメトリーのカリキュラムを設置している専門学校で学んだ方が、数少ないオプトメトリーストとして活躍しています。一方、アメリカでは、オプトメトリストの歴史は100年を超えると言われ、目の病気治療や手術を行う「オプトハモロジエスト」が「眼科医」ならば、オプトメトリストは、メガネを処方する「検眼医」として社会的地位が確立されています。

実は当会代表理事の久保田実希の実家も大阪府大東市で創業70余年の眼鏡店。筆者との出会いがきっかけで、久保田と実父の水上年容社長がオプトメトリー先進国との差異を知り、眼鏡店としても視覚機能やビジョントレーニングの知識を得ることが大切であるという思いから、筆者ともども北出先生のもとを訪ね、ご指導を仰ぎました。そして、私どもの協会の顧問に就任していただいたのです。

北出先生によると、つまずきのある子どもを支援する方法としては、ビジョントレーニング

目と身体と脳をつなぐビジョントレーニング

オプトメトリーのカリキュラムを設置している専門学校で学んだ方が、数少ないオプトメトリーストとして活躍しています。

一方、アメリカでは、オプトメトリストの歴史は100年を超えると言われ、目の病気治療や手術を行う「オプトハモロジエスト」が「眼科医」ならば、オプトメトリストは、メガネを

超えると言われ、根本的にメガネの処方も重要な力です。例えば、「プリズムレンズ」によって両眼の寄せる力を補助する方法がありますが、眼鏡店はもちろんのこと、眼科医にも今一つ理解が及んでいないのが実情です。

普通学級の先生方も 一読の価値あり

教育からスポーツの現場まで、

北出先生の活躍の場は多岐にわたりますが、著述活動もその一要素として、最後に著書を紹介させていただきます。

まず1冊目は、『学ぶことが大好きになるビジョントレーニング——読み書き・運動が苦手な子には理由があった』(図書文化社/2009年)。

これはまさに子どもの支援に主眼が置かれた著書で、学校生活や日常生活でのつまずきと目の機能の関係性がわかりやすく解説され、どんな子どもにどんなビジョントレーニングが必要か、その具体例が多数記されて

います。さらに、視覚機能のエック方法や現場(小・中・高校)での実践方法が簡潔にまとめられていて、ビジョントレーニングに興味がある教員の皆さんには格好の入門書になるでしょう。中でも「資格機能チェッククリエスト」が秀逸。学校の場面でのつまりが、視覚の入力の問題つか、あるいは処理の問題か、といったことが推測できます。

また、追従性眼球運動、跳躍たりますが、著述活動もその一要素として、最後に著書を紹介させていただきます。まず1冊目は、『学ぶことが大好きになるビジョントレーニング——読み書き・運動が苦手な子には理由があった』(図書文化社/2009年)。

これはまさに子どもの支援に主眼が置かれた著書で、学校生活や日常生活でのつまずきと目の機能の関係性がわかりやすく解説され、どんな子どもにどんなビジョントレーニングが必要か、その具体例が多数記されて



もう1冊、『クラスで楽しくビジョントレーニング——見る力を伸ばして学力＆運動能力アップ!』(図書文化社/2017年)には、ビジョントレーニングにとって重要な要素である「評価」「トレーニング」「再評価」が学習レベルに取り込まれ、実施された例が詳しく書かれています。ビジョントレーニングの基礎からトレーニングプログラムの組み立て方まで丁寧に説明されているので、子どもの発達支援に携わっている方には必携の書。

また、視覚機能に問題があると、こんなにも様々な影響が出るものなのか、ということを知つていただく意味においては、普通学級の先生方にもぜひ一読していただきたい1冊です。